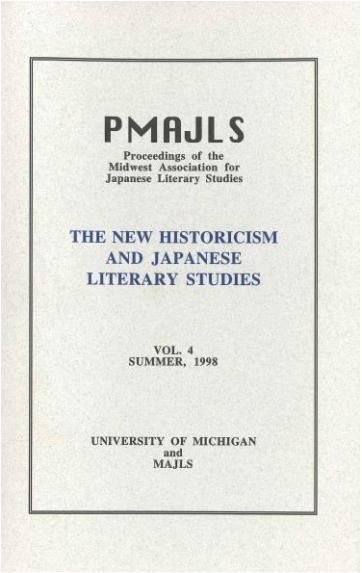
歴史としての文学・文学としての歴史：戦後文学と歴史修正主義
“Literature as History / History as Literature”

小森陽一 Komori Yōichi

Proceedings of the Midwest Association for Japanese Literary Studies 4 (1998): 19–36.



PMAJLS 4:
The New Historicism and Japanese Literary Studies.
Ed. Eiji Sekine.

歴史としての文学・文学としての歴史：
戦後の文学と歴史修正主義

小森陽一（Komori Yōichi）
東京大学

今日はサマータイムからの切りかえの日にあたります。このような境界を越える日に、この会議においてキー・ノート・スピーチをする機会を与えてくださったラミレス・クリステンセン教授、そしてこの会議を準備し運営にたずさわっている、ミシガン大学のスタッフのみなさんに、心から感謝の意を表明したいと思います。

今日にいたる二日間の会議において行われた、みなさんの発表と討議をとおして、あきらかに、この場で、一つの境界が乗り越えられようとしていることを、強く感じています。その境界とは、「日本人のことは日本人にしか分からない。そのことがわからない者は日本人ではない」という、日本国内の日本文学研究者にありがちな、排除の論理によって作り出されたもののことです。そして、この会議の場において、あらゆる問題をめぐって、本質的な意味でネイティブである、などということはありえない、ということが明らかにされつつあるのだと思います。しかし、現在の日本では、こうした認識とまったく逆行するネオ・ナショナリズムとでも言うべき動向があらわれてきています。

*

このネオ・ナショナリズムの問題をめぐって、二つの論争が展開されている。その一つは、「歴史教科書論争」あるいは「従軍慰安婦問題」と呼ばれている論争である。そしてもう一つは、文芸評論家の加藤典洋と哲学者の高橋哲也との間で始まり、その後何人かの論者が加わることとなった「歴史主体論争」と名付けられている論争である。「歴史主体論争」に関しては、もう一人のキー・ノート・スピーカーである柄谷行人氏が編集をしている雑誌『「批評空間』（一九九七・四）において、柄谷氏も参加して、問題の本質を明らかにする詳細な討議がなされて

いる。この二つの論争は、いわゆる歴史学という学問的な領域の境界を越えて、「記憶の内戦」とでも言うべき形で、現在の日本人の歴史認識の在り方を争うものとして展開されている。

「歴史教科書論争」は一九九七年四月から採用された、中学校の歴史教科書に、日本軍による「朝鮮人従軍慰安婦」の強制連行をめぐる記述が掲載されることから始まっている。敗戦後五〇年となる一九九五年七月に、東京大学教育学部教授藤岡信勝を中心に、「自由主義史観研究会」が組織された。彼らは「朝鮮人従軍慰安婦」の強制連行に、日本軍が直接関与した資料がない、ということだけを理由に、教科書の記述から、この項目を削除せよ、という運動を進めてきた。そして、こうした運動に既存の右翼団体が加わり、各地方会議で、「朝鮮人従軍慰安婦」の記述の載った教科書を、不採用にする決議をあげさせようと運動を全国的に組織していった。岡山県など、ごく一部の地方議会でこうした決議が採択されたものの、彼らの動向に反対する運動も広範に組織され、教科書を不採用にする決議をあげさせる運動は、事実上失敗している。

しかし、藤岡たちは、既存の右翼的知識人だけでなく、現在の日本の若い層に人気のある小林よしのりという漫画家をはじめ、テレビやジャーナリズムで有名な人々を総動員して、一九九六年十一月に「新しい歴史教科書をつくる会」を旗揚げし、「反日・自虐史観」を克服すると称した国民運動を組織しようと企てている。

藤岡たちの攻撃する「反日・自虐史観」とは、アメリカが押しつけた「東京裁判史観」と、旧ソ連の「コミンテルン史観」という二つの「善玉悪玉史観」に支配された、敗戦後の日本の歴史学と歴史教育を貫く歴史認識の在り方だということになっている。「東京裁判史観」とは、第二次世界大戦中の日本を「悪玉」とし、戦勝国を「善玉」とするものであり、「コミンテルン史観」とは「帝国主義」を「悪玉」とし、「社会主義」を「善玉」とするものであり、いずれも日本の過去の罪悪だけを強調する「反日・自虐史観」であるというのである。

藤岡たちは、自分たちの主張を、いわゆる「太平洋戦争肯定史観」とは異なるものだとし、「反日・自虐史観」でも「太平洋戦争肯定史観」でもない、第三の立場としての「自由主義史観」であると名付けている。しかし、その内実は、戦後日本の右翼勢力が繰り返し主張した「太

平洋戦争肯定論」や戦前・戦中の「皇国史観」の反復にすぎない。

しかし問題は、こうしたまったく水準の低い藤岡たちの主張を載せた複数の書物が数十万という単位で売れ、「サンケイ新聞」という特定の大手新聞が彼らを支えるキャンペーンを展開し、年齢的にもかなり広範な層に、彼らの歴史認識の在り方が浸透しているところにある。そこには、敗戦後五〇年という日本の歴史性の問題が、複数の要素の複雑なからみあいとして現象していると考えられる。

もう一つの「歴史主体論争」の発端になった、加藤典洋の「敗戦後論」（一九九五・一）の前提にも、敗戦後五〇年という歴史的な節目にともなう、日本の政治状況が置かれている。加藤は、細川首相が、歴代の首相としてははじめて第二次世界大戦における日本の加害責任を認めた後、相継いで発生した現役官僚たちの一連の失言による辞任事件を例にとり、一方で加害責任を対外的に認めながら、日本の内部ではそれを否定しようとする政治家たちの在り方の中に、敗戦によって、戦後日本が「ジキルとハイド」のような人格分裂になってしまった、と指摘し、その克服の方向を「敗戦後論」において提示しようとしたのである。

たしかに、敗戦後の基本的な政治構図としてあった自民党一党支配を見かけの上で終わらせた細川内閣は、一九九三年八月に、第二次世界大戦とそれ以前からのアジア諸国に対する加害責任と植民地時代の責任とを認めた。それに対して、その年の一二月、中西防衛庁長官が、憲法見直し発言をして辞任に追いこまれている。一九九四年五月には、発足直後の羽田内閣の永野法務大臣が、南京大虐殺は無かったという発言をし、その責任をとらされて辞任することになった。さらに、一九九四年八月、社会党の党首を首相とした村山内閣が発足した際、桜井環境庁長官が、「大東亜戦争」に侵略の意図は無かったという発言をし、アジア諸国からの非難の力もあって、辞任している。

敗戦後五〇年を直前にした時期に、日本の政治家の、戦争責任をめぐる認識の質の問題が、連続して政治の表舞台で問われることになったのである。

こうした事態が発生する要因としては、日本の侵略戦争の犠牲となったアジア諸国において、急速な経済成長と、それぞれの国なりの民主化が進展し、国際的発言権を獲得したことがあげられる。そして、八十

年代のバブル経済が崩壊するまで継続していた、日本から経済援助を優先させる開発独裁型の政治構造が、アジア諸国の中で崩れていくことによって、それまで抑圧されてきた対日批判が、国際政治の表舞台にあらわれてきたのである。

このことは、第一に、第二次世界大戦の戦後処理が、事実上アメリカの単独占領によって行われれ、旧ソ連や中国はもとより、アジア諸国が、日本の戦争責任を国際政治の場で追求することに、戦後五〇年間直接関与することができなかったということへの批判として現象している。

第二に、中国革命と朝鮮戦争とのかかわりで、敗戦後の日本が、アメリカによって冷戦の論理の中にシフトされ、その結果、東京裁判による戦犯への追求が途中で放棄され、「サンフランシスコ講和条約」に基づく単独講和によって、戦争責任への直接的言及のない形での戦後処理に対するアジア諸国の批判が現象した結果でもある。事実、日本という国は、旧ソ連、中国、朝鮮、韓国、そしてアジア諸国に対する、戦争責任をどのような形でとるのかということを含めた、講和の論理をもたないまま、戦後五〇年を過ごしてきてしまったのである。

つまり第三に、戦後五〇年もの間、アジア諸国に対する戦争責任の問題を、日本が自発的に問題化してこなかったこと、あるいは問題化することができなかったことへの批判でもあったのである。

こうしたアジア諸国の動向に対する反動として、「従軍慰安婦問題」を標的にした、「自由主義史観研究会」などの、歴史修正主義者たちによるネオ・ナショナリズムが台頭しはじめたのである。

そして何よりも重要なことは、戦争責任と敗戦後責任に対する日本の国家としての姿勢に対する批判が、日本という国家の外からと同時に内側からの運動としても同時にその強度を高めていったということである。過去から現在にいたる、日本の植民地支配や戦時下の暴力をめぐる記憶を想起し、言説化していくさまざまな運動の到達点が、アジア諸国からの批判と連動しながら、性差別や民族差別の問題を含めて、あらゆるレヴェルでの人権に対する侵害のあらわれとして、戦争を問い糾すことのできる地平が、一九九五年前後に形成されつつあった。その意味で、敗戦後五〇年は、戦後の終わりでは決してなく、新たな関係性の始ま

りとして位置づけなければならない。

そうであればこそ、藤岡信勝たちは、アジア諸国を中心とした、日本の戦争責任と戦後責任を追求する動きに対して、新たなナショナリズムを形成する運動を組織しようとしたのであり、その主要な攻撃目標を、「従軍慰安婦問題」にしぼってきたのである。なぜなら、「従軍慰安婦問題」こそが、戦後五〇年の沈黙を破る、国の内外における女性たちの運動を中心に政治・外交問題化したのであり、そこにおいて、日本の戦争責任と戦後責任があわせて問われたからである。そして、自分たちの主張を支える、誇りをもつことのできる近代日本のモデルを提出した「史観」として藤岡は、司馬遼太郎という、ベスト・セラーかつロング・セラー作家の歴史意識に全面的に依拠し、国民的に浸透した司馬遼太郎的歴史認識の記憶を呼び起こすことをとおして、自分たちの主張を拡げようとしているのである。

『汚辱の近現代史』の中で藤岡は、自分がそれまで、日露戦争の頃の日本の指導者たちを、「極悪非道なマフィアの一味であるかのようにイメージしていた」と語ったうえで、「『坂の上の雲』で、日露戦争期の国家指導者の良質の部分が、いかに渾身の力をふりしぼってこの民族的危機を防いだか、その事績に接して、私は彼らをならず者のようにイメージしていたことを誠に恥ずかしく、申し訳ないことであったと感じた」と懺悔してみせ、「司馬の小説を史論と組み合わせると、ひとつのまとまりをもった『司馬史観』を浮かび上がらせることができる」と述べている。

『坂の上の雲』は、同じ松山出身の、陸軍騎兵の創設者で、後の陸軍大将秋山好古、その弟で日露戦争の日本海海戦の参謀として有名になった真之、そして、二人の友人で近代俳句と短歌革新の中心となった正岡子規をとおして、日清戦争と日露戦争を描いた歴史小説である。藤岡の「善玉・悪玉史観を越えて」という主張の基盤は、この小説における司馬の記述の中にある。たとえば司馬は、敗戦後の「進歩的」歴史学の言説と保守的歴史学者の言説の両方を批判しながら、「国家像や人間像を悪玉か善玉かという、その両極端でしかとらえられないというのは、いまの歴史科学のぬきさしならぬ不自由さであり、その点のみから言えば、歴史科学は近代精神をよりすくなくしかもっていないか、もうとう

にもちえない重要な欠陥が、宿命としてあるようにおもえる」と述べている。

この議論は、日清戦争をどのように定義するのかをめぐってのものだが、左右両論を批判しうる、「近代精神」の体現者たる歴史小説家司馬遼太郎が、「歴史科学」に対して超越的な立場を獲得する布置になっている。そして司馬の定義は、帝国主義列強と拮抗するためにそれをモデルに近代国家をつくった日本にとって、日清戦争とは、「善でも悪でもなく、人類のなかにおける日本という国家の成長の度合の問題」であった、ということになるのだ。つまり、帝国主義戦争を結果としてしかたなかったこととして肯定する、という議論が特権化されていくことになる。

また、日露戦争について、『坂の上の雲』の中で司馬は次のように述べている。「日露戦争というのは、世界史的な帝国主義時代の一現象であることにはまちがいはない。が、その現象のなかで、日本側の立場は、追いつめられた者が生きる力のぎりぎりのものをふりしぼろうとした防衛戦であったことはまぎれもない」。司馬は、日露戦争が帝国主義戦争であることを認めつつも、欧米列強やロシアのアジア進出に対する、「追いつめられた」日本の「防衛戦」として位置づけることで、具体的に遂行された植民地主義については免罪していく、という論理を展開しているのである。

『坂の上の雲』が連載された一九六八年四月から一九七二年八月という時期は、政治、経済、外交のあらゆる面において、日本が一つの転機をむかえていたことを思い起こしておく必要がある。一九六八年一月、ベトナム民族解放戦線がテト攻勢をかけ、六一年七月以後アメリカが行なってきたベトナム戦争が、最終局面に入りつつあり、パリでの和平をめぐる外交交渉が行われていくことになる。第二次世界大戦の戦勝国アメリカの「正義」は地に落ちていた。ベトナム反戦運動を軸にしながら、沖縄返還問題、七〇年安保問題など、日米安保体制がその根底から問われつつ、日本国内における反米感情が最も高揚していた時期であり、高度経済成長を達成し、日中国交回復を政治日程の中に入れていた日本は、あらゆる面で、アメリカに肩を並べうる状況に成りつつあった。そうした日本を担っていたのは、敗戦のときに、青年だった人々であり

、戦時下の自分と日本を一旦否定したうえで、沈黙をしたまま経営者や官僚となった人々であり、この人たちが司馬遼太郎の小説をとおして、日本という国と自分に対して、自信を取り戻す物語をつくる通路を開いていったのである。

そしてやはりこの時期、敗戦後のベビー・ブームで生れたいわゆる「団塊の世代」が青春期をむかえ、自分たちの親の世代がつくった戦後日本に対する異議申し立てを行っていったのであり、その一つの象徴が「大学紛争」として現象していたのだ。当の司馬遼太郎がどれだけ意識的だったのかは別にして、『坂の上の雲』において、日清・日露の二つの戦争を肯定的に評価することによって、経済大国としての自信を確立しつつある敗戦後二〇年以上たった日本にとって、それを可能にした近代国民国家の物語を、一見対立しているかに見える二つの世代、親の世代と子の世代をつなぐイデオロギー操作によって国民的な規模で共有することを可能にしたのである。少なくとも「団塊の世代」にとって、司馬文学は、学校の教科書で教えられてきた歴史とはまったく異質な、教科書的公式性を崩すような近代国民国家をめぐる物語を提示していたからである。そのことをとおして、司馬は「国民作家」の位置を手にすることになったのだ。そしておりしもこの時期、戦争の加害事実をめぐる歴史教科書の検定に対する、家永教科書裁判がはじまるのである。

思えば司馬遼太郎が、ベスト・セラー作家になったのは、一九六二年六月から六六年五月まで『産経新聞』に連載された『竜馬がゆく』によってであった。坂本竜馬を、はじめて近代国家を自覚した、国家の人としての日本人であると描き出し、そのことによって、ネイション・ビルディングをめぐる典型的な物語を確立したのである。実は、幕末・維新期を舞台に、男性の英雄たちのセルフ・ビルディングをネイション・ビルディングに重ねて語る方法は、大正末期に成立した「大衆小説」から受け継がれた手法だったのである。

社会の底辺から、その上層へと昇っていくセルフ・ビルディングとネイション・ビルディングを重ねることができるのは、国家の変革期と新しい体制の形成期でしかない。『竜馬がゆく』をはじめとする、司馬の一連の維新ものは、敗戦後の日本を創った「企業戦士」たちが、自分の人生と国家を重ねながら、自信を形成する物語を、時代的なリアリテ

ィを内在させるかたちで提供することに成功したのであり、そのことをとおして、明治維新以後連続している近代日本という国家をめぐる幻想を創出したのである。

その意味で司馬文学は、いわゆる「戦後文学」に対する反動を吸引する装置としても機能していたといえる。「戦後文学」の一つの主題が、戦争を回避できなかった、近代日本の知識人の責任を、自己否定的な内省によって問題化していき、その思想的な弱さを明らかにしていくところにあったとすれば、司馬文学は、むしろ徹底して自己肯定的である。そして、その自己肯定を成立させるためには、「大東亜戦争」を陸軍の軍閥によって占領された日本が行った、愚かな戦争として、くり返し全否定しなければならないのである。昭和の軍閥政治に対する非難は、別な時代についての物語の中でも、くり返し「余談」として語られている。たとえば『竜馬がゆく』において、「宗教的攘夷思想」にふれたところで、「しかしその狂言的な流れは昭和になって、昭和維新を信ずる妄想グループにひきつがれて、ついに大東亜戦争をひきおこして、国を惨憺たる荒廃におとし入れた。余談から余談につづくが、大東亜戦争は世界最大の怪事件であろう。常識で考えて敗北とわかっているこの戦さを、なぜ陸軍軍閥はおこしたのか。それは、未明、盲信、土臭のつよいこの宗教的攘夷思想が維新の指導的志士にはねのけられたために、昭和になって無智な軍人の頭脳のなかで息をふきかえし、それがおどろくべきことに『革命思想』の皮をかぶって軍部をうごかし、ついに数百万人の国民を死を追いやった」、と述べている。戦時下の昭和を、全否定し、「軍部」と「国民」を対置することで、逆に「国民」によって担われた近代日本の連続性を創り出そうとしているのである。

一九七〇年代以後、司馬遼太郎の小説は、官僚や企業の管理職を中心に広範な読者を形成しつづけ、同時にテレビとメディア・ミックスしながら、国民的な歴史意識を形成する装置として機能してきた。日曜日のゴールデン・タイムに放映されるＮＨＫの大河ドラマなどで、繰り返し反復・再生産されることによって、気分・感情も含めた国民の平均的な歴史認識の枠組を、二〇年以上にわたって提供しつづけてきたことになる。過剰なまでに「大東亜戦争」を否定し拒絶する言説の反復が、一種の安全弁となり、司馬の日本の近代史全体に対する認識についての批

判を発生させないような構造が出来上り、数多くの対談をとおして知識人や文化人が司馬の見解に同意することによって、歴史認識をめぐる司馬の権威が気分や感情のレヴェルで創りだされていったのである。

一九九六年二月一二日の司馬遼太郎の死は、彼の「国民作家」としての位置を不動のものとした。ほとんどの総合雑誌が特集を組み、単行本から文庫本までが大増刷され、ＮＨＫや朝日新聞の出版部を中心に、大規模な司馬文学を顕彰するメディア・イベントが組まれつづけている。九七年秋から『街道をゆく』という歴史エッセイが、鳴り物入りでＮＨＫで映像化されはじめ、九八年の大河ドラマは『最後の将軍』を原作とした「徳川慶喜」である。藤岡信勝をはじめとする歴史修正主義者たちは、こうした司馬ブームによって国民的な規模で拡がっている、過去の記憶の想起の中に逃げ込もうとする欲望に依拠しながら、自分たちの主張を浸透させようとしているのである。たとえば『街道をゆく　韓のくに紀行』（初出、『週刊朝日』一九七一年九月）の中には、「日本国が過去に犯した韓民族へのすべての歴史的罪悪をすべて背負いこまされるのはこまる」といった御都合主義的な言説がはさみ込まれているのであり、植民地支配と戦争の責任を回避しようとする気分や感情を支える役割を確実に果しているのである。

バブル経済の崩壊、阪神大震災、オウム事件以後、決定的に自信を失いつつあった日本人にとって、未来に向かう大きな物語は存在しなかった。その代替として、過去の歴史をめぐる物語、自らも生きた高度経済成長期の記憶と明治維新や日清・日露の戦争をめぐる司馬の物語を合わせ鏡のように重ねることによって、不安から逃避する心情的通路が見出されていったのである。もちろんその傾向は、一九九七年に加速した、アジア諸国における経済不安、および日本国内における未曾有の金融不安によって、さらに拍車をかけられていると言わねばならない。

藤岡信勝らの歴史修正主義が、司馬遼太郎の文学によって六〇年代以後の日本人の中に形成された、漠然とした歴史意識を利用しながら、自分たちの主張の浸透を企てているわけだが、もちろんそれが可能になるより全般的な歴史的状況があることも、ここで確認しておかねばならない。

そもそも敗戦後の日本の歴史教科書が、文部省の検定によって、戦

時下の加害の事実や、戦争責任の問題を曖昧にしつづけてきたことに、最大の問題がある。そして、第二次世界大戦をめぐる歴史認識の問題が、事実の認識としてではなく、イデオロギー的な立場の問題として教育の現場では受け止められる傾向が強くなり、平和教育などに熱心な教師たちの実践はあったものの、むしろ教えることそれ自体に対する消極性が生まれ、事実上年度の時間切れを口実に、現代史にはふれないで済ませるという状況が多く発生した。

また、敗戦後の歴史学と歴史教育は、「太平洋戦争肯定論」を克服することにつとめ、侵略戦争を不可避なものとした、近代日本の政治・経済・社会体制の分析を行い、植民地や占領地における抑圧や収奪の実態、戦争犯罪の実態を明らかにしたものの、現実の戦後の状況の中で、誰が誰に対してどのように、責任をとるのか、といった「戦後責任」の問題を十分に明らかにすることができなかったという問題がある。

このことは、「東京裁判」が、朝鮮戦争によって、中途半端なかたちで終らせられ、日本が冷戦構造の中における、アメリカの極東侵略の要に組み込まれることによって、事実上、戦争責任を負わねばならないアジア諸国に対する具体的措置を棚上げにし、なおかつ中国や韓国・朝鮮に対する和平の論理を持たないまま、サンフランシスコ講和条約をアメリカとの関係だけで締結していく、という現実的な政治外交過程によっても規定されてきたのである。

さらにこれはＧＨＱの方針でもあったわけだが、第二次世界大戦中の日本は、一部の軍部の指導者が、国民をだまして無謀な戦争にかりたてていく状況であったという認識の枠が与えられ、軍部の指導者と国民を分離し、軍部の指導者だけにすべての戦争責任を転嫁し、総動員体制の中で闘われた戦争における、国民一人一人の責任が免罪されてしまうような言説の布置がつくられてしまった。同じ論理は、ソヴィエト連邦や中国、北朝鮮といった社会主義国とかかわりをもっていた、左翼的な運動の中でも機能させられていた。軍国主義的な政治指導者や軍部に戦争の責任はあるが、人民にはない、従って人民のレヴェルでは連帯が可能だ、といった単純化された議論によって、気分や感情における免罪が進行していくことになっていった。

こうした構図の中で、戦争の記憶を想起する日本国内での言説が、

被害者としての戦争体験の側面を強調する方向に傾き、加害者としての体験は、糾弾の対象となるか沈黙の淵に沈められてしまうような状況が形成されてしまった。東京大空襲をはじめとするアメリカ軍の無差別爆撃をめぐる言説、ヒロシマ・ナガサキへの原爆投下とその悲惨な結果をめぐる言説、あるいは旧満州におけるソヴィエト連邦軍の暴行やシベリヤ抑留者の体験をめぐる言説、つまりは「死ぬなかれ」という言説は拡がったが、その背後で、国民一人一人の加害責任をめぐる記憶の想起とそのことをめぐる言説が抑圧され、「殺すなかれ」をめぐる記憶は公共的な場でなかなか語られることはなかったのである。

こうした被害者としての側面だけを強調する言説は、気分や感情のレヴェルで反アメリカ・ナショナリズムや反共・反ソ・ナショナリズムと結合することによって、事実上、国民一人一人のレヴェルにおける加害行為が棚上げされ、そのことをめぐる責任の問題が曖昧化されていったのである。戦争が国家と国家の暴力的衝突であるとすれば、加害と被害の両面から、戦場で発生した事実が明らかにされない限り、戦争それ自体の実態はついに認識されえない。同時に加害と被害の事実認識からナショナリズムを抜きとらない限り、それは事実の認識ではなく、報復にむけての憎悪をかりたてる言説にしかならないのである。

しかし、なにより重要なことは、昭和天皇の戦争責任が、「東京裁判」においても問われることがなく、また天皇自らがその責任について言明することもなく、そして国家としての日本が交戦した、あらゆる交戦国に対しても、昭和天皇の戦争責任が問題化され、謝罪をはじめとするしかるべき意志表示が行われないまま、この世を去ってしまった、ということにある。もちろん天皇の戦争責任をめぐっては、あまたの議論が繰り返されてきたことも事実であり、出るべき議論はすべて出た、という評価を下すこともできるだろう。しかし、天皇が直接戦争に関与したのは、敗戦を決める「聖断」のときだけで、あとは、軍部が独断で進めたとか、天皇の「統帥権」は形式的なもので行使されることはなかったといった、免責論をいくら繰り返したところで、天皇が帝国憲法下において国家の主権者であり、国家としての責任を担う主体であったことを隠蔽することはできない。事実、治安維持法が制定される際に、はじめて「国体」という概念を法的に規定しなければならなくなったとき、

帝国憲法第一条の「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」という条項が、その法的根拠となったことからしても、法的には、まず昭和天皇が国家の主権者として戦争の責任を全面的に問われなければならないはずなのであり、それが、日本の戦争責任の全体像を明らかにする出発点なのである。もちろん、天皇の戦争責任を問わない、という路線は、日本政府の「国体護持」の思惑だけでなく、ＧＨＱの戦略とも深くかかわっていた、ということは、すでに多くの資料や言説によって明らかにされている。つまり、法的に戦争の責任の主体が問われるべきであった「東京裁判」の場で、東京の主体である天皇と、軍部の指導者が分離させられ、軍部の指導者だけが戦犯として裁かれ、天皇は免罪されるというかたちで、国家の主体をめぐる法的論理が歪曲されたこと、そしてその歪曲を誰もただすことのないまま、敗戦後五〇年以上が経過してしまったことが、あらためて問われねばならないはずなのである。

しかも、天皇の戦争責任が免罪されただけでなく、敗戦後の新しい憲法は、象徴天皇制をとることになったのである。昭和天皇が、軍部の指導者と分離されて免罪される構図と、国民一人一人が軍部と分離されて免罪される構図とは、相同的である。そして、戦犯にのみ戦争責任が転嫁されることによって、あたかも日本という国家が、戦争責任をすでにとったかのような幻想が、気分や感情のレヴェルで形成されたのである。もし、藤岡信勝らが「東京裁判史観」なるものを実定化して批判するのなら、戦犯となった軍部の指導部だけを「悪玉」にし、天皇とその臣民を「善玉」にするような歴史認識をこそ、まず解体しなければならないはずなのだ。

加藤典洋の『敗戦後論』は、細川首相が第二次世界大戦と植民地支配時代における日本の加害責任を認めた後、相継いで発生した、現役の閣僚たちによる一連の失言による辞任事件を例にとり、敗戦によって、戦後日本が「ジキルとハイド」のような人格分裂におちいっている、という現状認識から出発している。護憲派は外向きの自己で、戦勝国から押しつけられた憲法の理念、民主主義や人権の立場にたって、アジアの被害者に謝罪しようとするが、日本の戦死者に対して、誤った戦争による「汚れている」死であるがゆえに、きちんと弔うことをしていない。そして、なによりも、武力を持たない、という平和憲法、憲法第九条の

理念が、圧倒的な武力を占領軍からつきつけられることによって押し付けられたものであることを隠蔽している、と加藤は護憲派の「ねじれ」を批判する。

また、改憲派は内向きの自己であり、軍事力で押し付けられた憲法を戴く護憲派の自己欺瞞を暴いているが、昭和天皇の戦争責任は認めず、戦死者を靖国神社で英霊化するという、別な自己欺瞞を抱えていると、やはり改憲派にも存在する「ねじれ」を批判している。そしてこのような分裂があるから、日本人は「戦争責任」を負うことのできる一つの主体を持ちえていないのであり、「われわれ日本人」という共同主体を立ち上げるためには、護憲派のようにアジアの二千万人の死者だけに向かうのではなく、まずはじめに日本の兵士を中心とした三百万人の日本の戦死者を先に弔い、そこをとおって、アジアの死者に向かうべきだ、と加藤は主張したのである。

この加藤の主張に対して、高橋哲哉は、それがナショナリズムを復権する議論であるとして反論した。高橋は、「われわれ日本人」を立ちあげないとアジアの死者に向き合えないなどと言うべきではない。まずアジアの死者に向き合わなければ、「われわれ日本人」を立ちあげることもできないと言うべきだ、と批判したのである。高橋の議論に即して言えば、他者との関係ぬきに、自己の主体性や同一性を構築することは不可能であり、もし他者との関係なしに自己を構築した場合には、必ずあからさまな暴力性がそこにあらわれるからである。

加藤のレトリックの問題点は、護憲派と改憲派のそれぞれが抱えている「ねじれ」を、あたかも同質で対称性があるかのように論じてしまっている点と、この護憲派と改憲派という二項対立を、「日本」あるいは「日本人」という本来一つであるべき主体の人権分裂として比喩化している点である。

加藤の言う護憲派の「ねじれ」の一つが、銃をつきつけられたかたちで平和憲法を認めさせられたというところにあるとすれば、同じ論理の下で、銃をつきつけられたかたちで象徴天皇制を受け入れさせられた、ということを同時に問題化しなければならないはずだ。戦争を遂行した国家の主権者であり主体でもあるところの、昭和天皇の戦争責任が、つまり軍事行動の命令主体の責任が明らかにされないまま、その命令に

従って死んだ兵士たちの死を弔う論理は生まれてこないはずだ。

この論争は、「戦争責任」や「戦後責任」を担いうる者は何者なのか、そして「責任」を担うということはいかなることなのか、という重要な問題を提起している。

「戦争責任」を個人の問題に還元してしまうと、戦後世代には「戦争責任」はなく「戦後責任」だけがあるということになるが、「戦争責任」のないところに「戦後責任」だけを成立させることはできない。ここに、歴史修正主義者や加藤典洋が主張する、日本人は日本人としてしか歴史にかかわれないのであり、歴史の主体は民族あるいは国民であり、「われわれ日本人」という国民的主体であるべきだ、という主張があらわれてくる要因がある。問われているのは、「戦争責任」と「戦後責任」にかかわるために、日本国という政治的共同体に帰属することを一旦認めたうえで、同時に国家・民族・国民に還元することの出来ない、個人の多様な帰属関係の複数性において、いかに「戦争責任」と「戦後責任」にかかわっていくのか、ということである。

この論争が、やはり文学、とりわけ戦後文学と深くかかわっているのは、加藤典洋が日本人の死者を弔って後にアジアの死者へ、という自らの議論を実現しているのが大岡昇平の『レイテ戦記』である、と主張しているところにある。しかし、加藤の主張は明らかに大岡の仕事を歪曲している。なぜなら、大岡は、レイテ戦にかかわった一人一人の兵士のレヴェルから、日本軍の司令部、さらにはアメリカ軍の兵士から司令部、そして現地のフィリッピンの住民にいたる、はかりしれぬほど複数の他者との関係の中で、『レイテ戦記』を語る自己を構成しているからである。

司馬遼太郎は、自らがかかわった太平洋戦争について、小説家としてのまとまった言説を決して書こうとはしなかった。大岡昇平は『レイテ戦記』を新しい資料や批判が出るたびごとに書き直していった。しかし残念なことに、敗戦後の文学的実践として、『レイテ戦記』のような仕事は稀である。自らがかかわった戦争について、その全体像を言説化していく多様な試みは、歴史が現在において構成される言説である以上、たとえ戦後生れの世代だとしても、実践することが可能であるはずなのだ。そのような実践の中で、「戦争責任」と「戦後責任」が同時に問

われることになる。なぜなら、「戦争責任」を問う、他者との関係性の間で、責任を担う者としての位置を、責任の内容が、その都度認定されていくのであり、その責任を現在においてどのように担い、かつ果たしていくのかという実践的な選択、そして実践的であるが故に倫理的な選択において、「戦争」それ自体の記憶の想起の質が問われるからだ。

おそらく、「戦争」の記憶を、責任が問われる全体性において想起するためには、「レイテ戦」という一つの戦場において発生した事実を記憶に刻むために、大岡昇平が行った『レイテ戦記』のような実践が不可欠なのであり、そのためには、複数の他者の記憶を、自らの記憶として書きこみつづけなくてはならないのである。その実践において、日本人の死者を弔うのが先か、アジアの死者を弔うのが先か、といった加藤典洋のような議論の立てかたそれ自体が無効になるのである。問題は、一人一人の他者において差異的でしかない、複数の、「戦争」の記憶を、その具体性において自らの記憶としてどのように統合していくのかという実践性にある。もちろんそこでは、決して同一化することのできない他者への想像力の発動の仕方が問われつづけていくわけである。

Note: Part of this article is published in Takahashi Tetsuya and Komori Yōichi eds., *Nashonaru hisutorii o koete*, (Tokyo: Tokyō daigaku shuppankai, 1998).

Exercpts

Literature as History / History as Literature: Post-WWII Literature and Historical Revisionism

Komori Yōichi
Tokyo University

In Japan, there are currently two debates related to the rise of neo-nationalism. One is a "history textbook debate" focusing on the issue of comfort women during WWII; the other is a "historical subjectivity debate," dealing with philosophical understanding of the notion of war responsibility.

The history textbook debate is led by Fujioka Nobukatsu, Professor of Education at Tokyo University, and the "Liberalist

Historical Studies Group." They demand that pages describing Korean comfort women, included in history textbooks since 1997, be omitted. According to this group, WWII has been viewed by the victors' logic, established by the Tokyo Trial, which criminalized Japan simply because of the defeat. Together with Communist criticism of Japanese Imperialism, Japan's involvement with WWII has been viewed as nothing but negative. Fujioka's group claims that what Japanese need today is to develop a positive national identity by overcoming those logics that "self-punish" them. Inclusion of the issue of comfort women in a textbook is, from their standpoint, a symbol of the self-punishing approach to history. They insist that the issue needs not be discussed because nothing really proves that the Japanese Army directly summoned these women to service. Despite their disclaim, their "liberalist" revision of the history of WWII is nothing but the search for reidentification with the Japanese Empire. Supported by right wing activists, as well as conservative media, the group now is gaining in popularity.

It should be noted that Fujioka's revisionism is inspired by Shiba Ryōtarō's Clouds above the Hill, a novel that describes Japan's wars with China and Russia during the Meiji period. Japan's involvement with these wars is described as something self-defensive and something inevitable for the developing process of the nation's modernization. The fact that the novel was written from 1968 through 1972 is indicative of its self-affirmative tone in terms of its evaluation of modern Japanese history. It is a time when America's world hegemony was shadowed by the Vietnam War and Japan started its economic rise; it is also a time when student activism had its last and intense rise, in which baby-boomers critically opposed values established by their father's generation. By stressing necessity, continuity, and progressivity of Japan's modernization, Shiba's

novel helps the social majority develop a positive self-image as an economic power yet suppress its internal generational conflict.

Shiba rewrites Japan's modern history as a consistent success story, fought by nameless, yet decent, ordinary people. In order to keep storyline consistency, he is led to explain that WWII was choreographed by the army clique's highjacking of Japan: His logic goes in such a way that the fanatic few in the Army should be the only ones to be blamed and that the decent majority of the nation were actually victims of such an insane highjacking.

The post-WWII world order has provided Japanese with a favorable historical twist. To be an ally of Japan in the cold war against communism, the US has let Japan not fully discuss Emperor Hirohito's war responsibility and not clearly conclude peace with countries in Asia. This historical context has encouraged Japanese to describe themselves as victims of the WWII atrocity, symbolized by A-bombs, and to forget the fact that they were victimizers of a number of massacres in Asia. Neo-nationalists like Fujioka are eager to suppress the issue of Japan's war responsibility by trying to erase negative historical facts. A sudden emergence of the discussion on comfort women, years after the war, rubs these nationalists the wrong way; they are reacting self-defensively.

The other debate is initiated by a literary critic, Katō Norihiro, who problematizes today's Japanese approaches to dead soldiers in WWII. The pro-Constitution group cannot pay full respect to dead soldiers because according to the Constitution's democratic ideal they support, these warriors died for an "unjustifiable" cause fabricated by Japanese Fascism. As for the anti-Constitution group, they tend to melodramatically mythologize Japanese war heroes and the Yasukuni Shrine. Katō

claims that "we Japanese" need to heal from this national split-identity, created by the defeat of WWII. The first step for healing should be to learn how to make a truthful memorial service for dead warriors. With restored national unity and identity, Katō insists, Japanese will become capable of taking sincere responsibility for their crimes committed in Asia during WWII. A philosopher, Takahashi Tetsuya, criticizes Katō, by arguing that the search for our national identity as Japan's own autonomous project, without dialogues with people in different countries, will become dangerously self-seeking and harmful for the understanding of the complex nature of the issue of war responsibility. Agreeing with Takahashi, Komori critically comments on Katō's claim that his argument is originally inspired by Ōoka Shōhei's Reite senki (Record of the Battle at Leyte). According to Komori, Ōoka's book is a rare practice of recording the author's individual experience of the war in such a way as to connect it with memories of countless others involved in the same battle. Ōoka thus allows us to see and question the complexity of an individual's relationships with others, as well as of his responsibility at each specific moment in the battlefield. War responsibility is here argued within the context that articulates concrete specifics of a particular battle and at the same time examines a diversity of experiences of different people involved in a war. In spite of his claim, Katō does not seem to learn, criticizes Komori, from Ōoka's complex approach when he arbitrarily limits his argument on war responsibility to the mere level of the search for national identity. Komori concludes that Ōoka's depiction of war experiences invites us to vividly relive a complex realness of past historical moments and convinces us that it is also our responsibility to keep thinking and questioning the meaning of war. [E.S.]